

地域に根ざした特色ある学校づくりの方途

長期研修員 井 作 謙
Isaku Ken

要 旨

今、学校は、地域や子どもの実態に応じて創意工夫を生かした特色ある学校づくりを進めることが強く求められている。そこで、本研究では、教職員の共通理解を図り、家庭や地域との信頼関係づくりを積極的に進める中で、地域の教育力を活用した特色ある学校づくりの方途について研究した。

キーワード： 教職員の共通理解、地域の教育力、伝統文化教育、特色ある学校

1 はじめに

小・中学校では平成14年度から、高等学校においては平成15年度から新学習指導要領に基づいた教育課程が実施されている。新学習指導要領は、完全学校週5日制の下、「ゆとりの中で特色ある教育を展開し、生きる力を育成すること」を基本的なねらいとしている。改訂の基本方針にも「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育、特色ある学校づくりを進めること」と示されており、これからの学校教育は自主性・自律性を基盤とした「特色ある学校づくり」を、より一層進めていくことが求められている。

その実現を目指すためには、校長自らが教育理念や教育方針を教職員はもちろんのこと、家庭や地域に対しても明確に示さなければならない。そして、学校・家庭・地域が教育に果たすそれぞれの役割を見直し、互いが教育力を高めつつ連携・協力する地域ぐるみの教育の推進を目指さなければならないと考える。

2 研究目的

地域の教育力を活用した「特色ある学校づくり」について研究する。

3 研究方法

- (1) 特色ある学校づくりを目指す学校経営について考察する。
- (2) 置籍校（曾爾村立曾爾小学校）での地域の教育力を活用した「特色ある学校づくり」をシミュレーションし、実践への具現化を図る。

4 研究内容

- (1) 「特色ある学校づくり」を目指す学校経営の方途

教育課程審議会「中間まとめ」（平成10年7月）の「教育課程の基準の改善のねらい」は、地域や学校、子どもの実態に応じて、「各学校が創意工夫を生かし特色ある教育を展開することが大切である」としている。このことを受けて、学校では特色ある学校づくりのビジョンを策定する必要がある。学校教育目標である「目指す学校像」「育てたい子ども像」などに、特色ある学校づくりの出発点がある。

ア 創意ある教育計画の策定

学校の創意ある教育計画の策定に当たって一番重要なことは、「このような子どもに育てます」という教育目標を具体的に示すことではないかと考える。例えば、「人間性豊かで、心身共にたくましい児童を育てる」という教育目標設定には、①よく考える子どもを育てる－自分の考えや意見を持ち、創造力豊かに進んで勉強する子、②自分も人も大切に育てる－豊かな心を持ち、互いに支え励まし合い、仲間と共にのびる子、③たくましい子どもを育てる－心身共に健康で強い意志を持ち、最後までやりぬく子、という目標の観点を明確にすることが大切である。このことは、より具体的な実践課題策定のためのベースとなる。

イ 教職員の意思の結集

校長がリーダーシップを発揮して教職員の意思を結集することは、特色ある学校づくりを進める上での重要な課題となる。実践研究が十分な成果をあげることができなかった場合の多くは、研究の趣旨やねらいを教職員が十分理解、納得していないことがその原因となっているのではないかと考える。

そこで、特色ある学校づくりをどのような趣旨と目的、目標のもとで進めていくかを、職員会議や校内研修会などを通して共通理解を深めていくことが重要となる。その中で、個々の教職員の役割を明確にし、「特色ある学校づくり」への意思と意欲を結集させていかなければならない。

ウ 子ども・家庭・地域の実態やニーズの把握

特色ある学校づくりへの取組は、以下のような一連の流れにおいて展開しなければならない。

①これまでの教育活動の点検と反省→②目指すべき学校像・子ども像の明確化→③学校教育目標の設定と計画の策定→④校内組織の構築→⑤家庭・地域に説明し支持を得ること→⑥実施→⑦評価と改善

こうした「特色ある学校づくり」への取組の前提として、子ども・家庭・地域の実態やニーズを把握し、課題を明確にしておくことが不可欠である。

エ 家庭や地域との信頼関係づくり

学校と家庭や地域との連携の重要性は、従来からも指摘されてきたところである。しかし、これまでの学校と家庭や地域との関係は、学校から一方的に協力を求めることが多く、家庭や地域の意向、要望などを反映する関係になっていなかったという側面もある。

そこで、特色ある学校づくりを推進していくためには、家庭や地域との信頼関係づくりを積極的に進め、それぞれの教育のあり方を見直し、家庭や地域の教育力が学校の教育力を高め、学校の教育力が家庭や地域の教育力を高める双方向の連携を構築することが必要となる。

(2) 置籍校での「特色ある学校づくり」のシミュレーション

ア 地域の概要

曾爾村は、人口2,200名余りで奈良県の東北端、三重県境に位置している。村の大半を占める山地は室生火山群に属し、亀山、曾爾高原などの山々は室生赤目青山国定公園に指定されている。

本村でも近年、少子高齢化及び人口の減少が急激に進む中、地域の活性化対策として多くの施策が展開されている。最近では、豊かな自然や歴史、文化など個性ある地域資源を活用した都市住民との交流の場づくりや社会福祉施設建設が進んでいる。さらに、生活基盤整備の一環として、地域間の交流を活発にし、高齢社会に対応した安全で快適な道路整備が進められるなど、全村あげて活性化対策に取り組んでいる。

イ 置籍校の現状

置籍校は学校統合4年目で、児童数は67名である。児童は少人数のために家族的な雰囲気の中でのびのびと育ち、性格も素朴で朗らかである。しかし、児童数の減少などにより対人関係が固定しやすい傾向が見られる。そのため、豊かな対人関係を築いたり、コミュニケーション能力を培った

りするものの必要性が感じられる。地域住民は、親子二代あるいは三代にわたって本校で学んだ方が多く、母校への愛着があり、学校の教育活動に対して協力的である。そして、統合された学校を「地域のシンボル」としてとらえ、学校と共に力を合わせて子どもを育てようという意識が、学校教育推進の後押しをしてくれている。このような現状から、家庭や地域などにおける外的要因と学校における内的要因の利点を組み合わせて、特色ある学校の全体像をとらえた（表1）。

表 1 外的要因と内的要因の利点

外的要因（家庭・地域）〈利点〉	内的要因（学校）〈利点〉
① 村民の「おらの村、おらの学校」という意識から、地域や学校への愛着心が強い。	① 教職員数が少ないため、自由な意見交換による研修の場が設けやすい。
② 新校舎建設を含め教育環境の整備など、村からの強力なサポートがある。	② 素直で明るい子どもが多く、仲間意識が強い。
③ 地域の人々は、学校を地域のシンボルとしてとらえ、学校教育推進の後押しをしてくれる。	③ 村内にある学校は、小中学校1校ずつであるため、連携が図りやすい。

曾爾小学校の今年度の研究テーマは「曾爾のよさを生かし、心豊かに生き生きと活動する子どもの育成」である。子どもたち自身が自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、自ら問題解決を目指す資質や能力の育成を図るとともに、ふるさとの自然や文化、くらし、地域の人々との触れ合いを通して、ふるさと曾爾への愛着心をはぐくむ取組の実践がなされている。

ウ 学校教育に生かす地域の伝統文化

校区には、県の文化財に指定されている「曾爾の獅子舞」という伝統文化が、幾世代にもわたって脈々と受け継がれており、生活に密着した文化となっている。しかし、過疎化と少子化で若年層がますます減少する村にあって、伝統文化の継続そのものが危うくなっている事実は否めない。近年は、情報源が豊富になり、都会も田舎も瞬時に同じ情報を入手することができ、村民の価値観も多様になった。それ故か、子どもの伝統文化に接する機会が少なくなり、大人と子どもが共通の文化に触れて感動するということが希薄になってきていることは残念である。

このような現状にあって、子どもたちにとって身近で、魅力的な地域素材である獅子舞などの伝統文化を学ぶことが、地域を理解し、地域を誇りに思う子どもの育成、ふるさとを愛する子どもの育成につながるのではないかと考える。そして、地域との「ふれ合い」や「地域に参加する」から、「地域のために」を視野においた教育活動の展開を通して、学校教育と地域の教育力の融合を図っていきたい。

エ 「特色ある学校づくり」の基本構想

(ア) 「特色ある学校づくり」推進組織の確立（図1）

推進組織には、伝統文化保存会や推進委員会を重要なものとして位置付けた。

(イ) 伝統文化教育全体計画

学校教育目標の具現化を図る上で、教育内容や地域人材などの活用方法を考える必要がある。教育環境、施設や教材などの学校内の資源と、地域の人々や地域の文化・歴史・自然などの学校外の資源を効果的に活用することを通して、特色ある学校教育計画と伝統文化教育の全体計画を具現化していくことが重要となる。

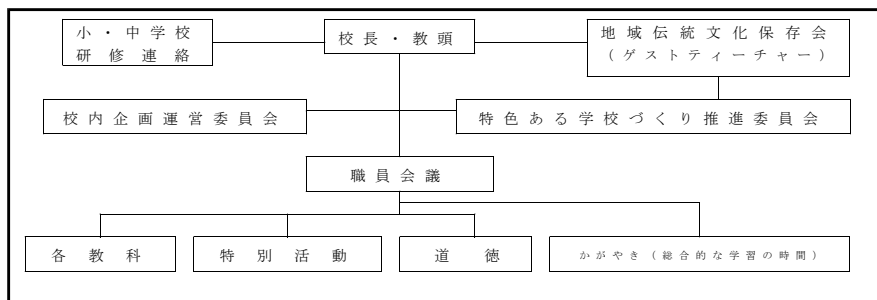


図1 「特色ある学校づくり」推進組織

特色ある学校教育計画と伝統文化教育の全体計画を具現化していくことが重要となる。

(ウ) 地域の人材を活用した取組

a 地域人材活用の意義と期待できる効果

ともすると閉鎖的になりがちな学校を地域に開き、教師だけではカバーすることのできない領域について、外部の新しい発想や地域の教育力を積極的に取り入れることにより、教師の意識改革や学校運営のパワーアップを図ることができる。

さらに、地域の大人が、幅広い経験を積んだ人生の先輩としての立場から、子どもに学ぶことや働くこと、そして、生きることの意味と意義を語りかける場面を設定する。このことにより、子どものモチベーションを高めることができる。

このように、特色ある学校づくりを実現していくために、地域人材の活用は大きな教育的効果を発揮する。

b 学校と地域人材の連携

学校と地域人材の連携において大切なことは、教師が「何のためにこの学習があるのか」や「何のために来てもらうのか」というねらいや目的を明確にもつことである。その上で、それぞれの考え方を話し合っって両者でしっかりと話し合う。その際に学校側の要望だけを主張するのではなく、地域人材からの期待や願いを理解するように努める。また、特定の担当者に任せるのではなく、多くの教師が関わることで、地域人材とのパイプも太くなり連携に継続性が生まれる。

地域人材の協力を得た学習活動を展開するに当たっては、地域人材のリストアップや地域人材との直接交渉、事前の打合わせの内容が大変重要となる。

また、これらの作業にも子どもを積極的にかわらせていく学習過程を大事にしなければならないことは言うまでもない。

(エ) 伝統文化教育における学習展開と評価

伝統文化教育における学習プログラムの展開は、総合的な学習の時間（かがやき）を中心に進めていく。

そこで、総合的な学習の時間の実践として、四つの学習場面を考えた。

a 「ふれる」－課題発見の視点を明確にし、地域に伝わる伝統芸能を見たり、聞いたりすることを通して課題の意識付けを行う。

b 「つかむ」－伝統文化とは何か、伝統文化をもっとよく知るにはどうすればよいかなど調査活動を構成する。

c 「追究する」－伝統芸能について体験したり、調べたり、発表したり、更に追究したりする。

d 「生かす・広げる」－地域に住む一員として自分のできることを考え、実践に移す。

このように、「ふれる」－「つかむ」－「追究する」－「生かす・広げる」という過程を設け、この各過程ごとに教科と同様、「関心・意欲・態度」「思考・判断」「技能・表現」「知識・理解」の四つの観点による評価を行う。

(オ) 子どもによる自己評価

何のために自己評価するのかを考えたとき、最大の目的は、主体的な学習をつくるためであり、自分の活動内容を振り返り、評価できることや足りないことを明らかにする力を身に付けていかなければ、主体的な学習を行うことは難しい。このような意味でも、それぞれの場面で自己評価を積極的に取り入れていかなければならない。

そこで、伝統文化学習において、子どもたちが

表2 振り返りカード

振り返りカード③	
() 年 名前 () I 次の質問に答えてください。 ABCDの記号のどれかを記入しましょう。 [A:よくあてはまる B:ややあてはまる] [C:あまりあてはまらない D:全くあてはまらない]	
1	何を学習するかがはっきりわかった。
2	体験学習（獅子舞、太鼓など）は楽しかった。
3	友達と協力して学習できた。
4	自分で考える場面があった。
5	自分でやってみようという気持ちになった。
6	わかったことやできるようになったことがあった。
7	先生やゲストティーチャーの説明・教え方がわかりやすかった。
8	先生やゲストティーチャーから励ましや声かけがあった。
II 今回の学習全体を振り返ってもらいます。 (1) 学習の設定からまとめの段階までを通して、自分で成長できたことはありますか。	

自己評価をする場面を考えたとき、1回目は「課題設定の場面」、2回目は「課題追究の場面」、3回目は「まとめ」の場面が考えられる。そして、それぞれに「子どもの学び」を的確に把握する評価基準を作成するとともに、学習振り返りカードなどの工夫をしながら、自己評価力をさらに高めていく必要がある（表2）。

(カ) 教師による自己評価（表3）

伝統文化教育推進の指導体制は、様々な学習内容や学習形態に対応するために整備していかなければならない。教師間のもとより、教師と地域人材との協力体制や、子どもとゲストティーチャーとの触れ合いを豊かで継続的なものとしていくためにも、それが学校にも地域にも有益な活動に成り得ているかを常に振り返ることが必要である。

表3 伝統文化教育〈地域人材活用に関する〉自己評価（例示）

評価領域	評価項目（伝統文化教育活動）		診断
総合的な学習の時間	計画・準備	<ul style="list-style-type: none"> ・地域人材活用に関する担当教員を、校内組織に位置付けている。 ・学習活動における地域人材の活用について校内の共通理解ができている。 ・地域の人や、地域の関係機関とのネットワークが構築できている。 ・地域の人々の願いや思いを確認している。 	
	実践	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと地域人材とが双方向でかかわりをもつことができる計画を作成している。 ・子どもと地域人材のどちらにもメリット（期待や願いの実現など）のある計画を作成している。 ・子どもと地域人材がいっしょに活動（地域への参加・貢献）できる計画を作成している。 ・子どもに地域人材に協力してもらう必要感をもたせることができている。 ・子どもと地域人材とが十分にかかわりをもつために、情報収集や情報交換のための時間を確保している。 	

(キ) ゲストティーチャーにおける外部評価

伝統芸能の体験学習（太鼓をたたく、横笛を吹く、獅子を舞うなど）において、ゲストティーチャーの目線で子どもの学習活動をとらえてもらうことができる。同時に、子どもへの評価だけでなく、教師の学習活動に対する指導なども含め評価をしてもらうことが大切である。

表4 外部評価カード

【外部評価カード】

学習日：月 日() 名前()

本日は、お忙しい中にもかかわらず、ご指導していただき誠にありがとうございます。本日の学習を通して、「子どもの学習への関心・意欲・態度面」と「教師における学習活動の構成面など」に対する『評価』をよろしく願います。

■ 評価は4段階→ [4：たいへんよい・3：よい・2：もう少し・1：頑張ろう]

番号	子どもの評価観点	4	3	2	1
1	子どもたち一人一人の表情は明るく、生き生きしていたか？	□	□	□	□
2	自分の目当てをもって、学習にのぞもうとしていたか？	□	□	□	□
3	話をしっかり聞きながら、練習（獅子舞など）に取り組んでいたか？	□	□	□	□
4	質問内容をよく考えて、進んで発言していたか？	□	□	□	□
5	今日の学習で学んだことを、今後に生かそうとしていたか？	□	□	□	□

オ 特色ある学校づくりの評価

学校評価の中で行う「特色ある学校づくり」の項目では、特色ある学校づくりのプロセスとその成果を大事にしなければならない。もちろん、学校づくりの基礎は、確かな学力を定着させることにあり、学力の評価は必然である。また、目標が達成されるために整えなければならない諸条件の評価も重要となる。

「子どもたち一人一人の表情は明るく、生き生きしていたか？」などとする。

- a 目的・目標面の評価項目－「自校における学校や地域、子どもの実態把握は適切か。学校や地域、子どもの実態から分析した自校の課題は適切か。課題に基づく教育目標の設定や教育課程の編成は創意工夫して適切に進められたか。」などとする。
- b 内容・方法面の評価項目－「学習指導要領が目指す学力は育っているか（自ら学ぶ意欲・思考力・判断力・表現力・知識・技能などの資質や能力などの生きる力）。体験活動や問題解決学習を重視し、子どもの生き生きした活動をつくり出しているか。」などとする。
- c 条件整備面の評価項目－「学校の教育活動を支える人的・物的諸条件は適切に整えられたか。教師の指導力などの資質・力量の向上を図る研修は適切に進められたか。保護者や地域と連携し、信頼される学校づくりが進められたか。」などとする。

カ 家庭・地域に向けての丁寧な広報活動の展開

a 結果説明

- ・年度初めに、家庭・地域に対して、学校教育目標、経営方針、教育計画や教育活動その他の学校

運営の状況について、積極的に説明・情報提供をしていく。

- ・年度の途中に、実際に進めている状況を確認してもらう。
- ・事業終了時に、取組の経過と実際の状況（結果）について報告する。

結果説明の要件として、取組の説明や評価の実施及び学習したことの成果を具体的に示さなければならない。そして、残された「問題点や課題」を明確にするとともに、課題改善策を具体的に説明することが必要である。

b 家庭や地域との相互の情報交流（図2）

情報発信・公開については、学校便り、学年便りなどの活字で情報発信をすることが必要である。また、情報収集には、PTA広報誌などを活用し、アンケートを取ることも効果的である。

このように、学校と家庭・地域との情報交流では情報の流れが常に双方向になるように可能な限り工夫し、学校と家庭・地域のそれぞれが、互恵的な関係を構築できるように努めなければならない。

また、管理職は学校のスポークスマンとして、あらゆる機会をとらえて自校のPRに努めるとともに、保護者や地域の人々に対して、学校のパートナーとしての自覚を促すメッセージを、繰り返し送り続けなければならない。

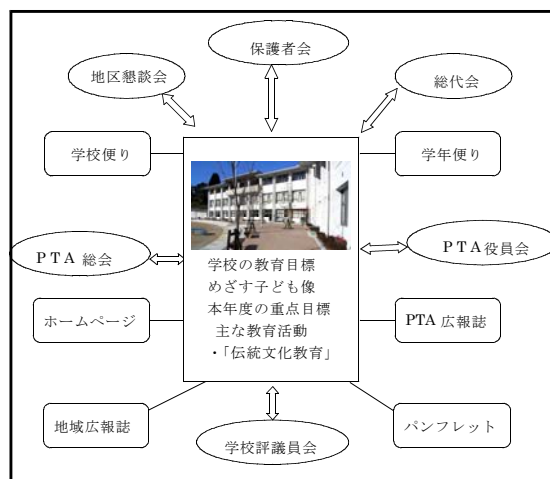


図2 学校からの情報発信・受信

5 研究の結果と考察

学校の特色とは、何か特別なことを実施するというよりも、むしろ、自らの足元をしっかりと見つめ直し、子ども・家庭・地域の実態を基にした実践から創出されるものである。

本稿では、地域の伝統文化を学校教育に生かす取組を、地域の教育力を活用することを通して具現化することを考えた。この取組を進めるに当たっては、管理職のリーダーシップのもと教職員の総意と家庭、地域の連携・協力が欠かせないものとなる。

地域の歴史や文化を学ぶことにより、郷土を理解しそこに流れる人々の心を感じ取ることは大切なことである。「文化や伝統を大切に作る心や、地域のよさを自覚し郷土を愛する心」は、子どもたち自身が単なる知識としてではなく、手で触れ実際に体験することで育成されるものである。その意味において、伝統文化教育は、「地域に根ざした特色ある学校づくり」を目指す教育の営みとして効果的な手段であると考えられる。

子どもたちが、わが母校を、わが地域を誇りに思い、自信をもって語るができるように育てたい。更に将来、子どもたちが地域に戻り、地域の文化を継承し発展させていこうとする熱い思いをはぐくむ取組を進めていきたい。

参考・引用文

- | | | | |
|----------------------|-------|---------|-----|
| (1) 特色ある学校の創造 | 新井郁男 | 教育開発研究所 | 平10 |
| (2) 高めたい地域・家庭と連携する力 | 葉養正明 | 教育開発研究所 | 平13 |
| (3) 学校と地域を結ぶ総合的な学習 | 中留武昭 | 教育開発研究所 | 平14 |
| (4) 初等教育資料 (N0, 767) | 文部科学省 | 東洋館出版社 | 平15 |
| (5) 学校を変える校長の裁量権 | 葉養正明 | 教育開発研究所 | 平15 |
| (6) 外部人材の活用を実践から学ぶ | 今谷順重 | 教育開発研究所 | 平16 |